

もく 堤外と堤内 P1 足立のウブメ P2
じ はい、文化財係です 12 出土したレンガ P3



堤外と堤内

ていがい
ていない

足立史談

第618号

2019年8月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

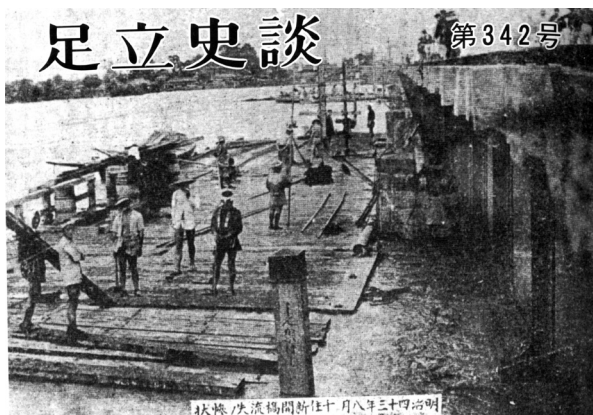
(30-309)

■隅田川と荒川

荒川に放水路ができる以前は、荒川上流の水はすべて隅田川に注いでいました。現在の隅田川と荒川の水量を合わせて考えてみると、そんな大量の水を狭い隅田川で引き受けられたのだろうか、溢れる隅田川を想像して恐ろしさを感じてしまうのですが、昭和五(一九三〇)年までは隅田川のみだったので、洪水もあったとはいえ何とか大丈夫だったのか、と妙な感心をしてしまいます。この隅田川(荒川)周辺のことで気づいたことを綴ってみます。

■新開橋

千住に新開橋という橋があったことはご存知と思います。南足立郡で



(上) 千住町地図 (大正8年)

(下) 史談に掲載された新開橋流失の絵葉書

は千住大橋について大きな橋だったのですが、明治四十二(一九六七)年に架橋され、翌年の水害で流失してしまいました。この橋の位置ですが、現在の千住河原町と橋戸町の境、日光街道から旧道が分かれたところあたりにありました。橋の長さは五〇メートルもあったといえます。なぜ千住大橋に次いで大きな橋がこんなところに架かっていたのでしょいか？橋の下は何だったのでしょうか？現在のその場所からでは想像できないのですが、大きな沼沢地だったようです。明治四十三年の水害の際に流失した新開橋の絵葉書(写真)がありますが、それを見ると、流された橋が、荒川のような大きな沼に浮かんでいてレンガ製？の高架橋(常磐線の線路橋)に寄りかかっているように見えます。新開橋を架けた理由は、ここが交通の大動脈日光街道で人馬の通行も多く、しかも橋を架けなければならないような土地だったからでしょう。場所はまったく異なりますが、五十年以上前、現在の栗原二丁目あたりは背の高い葦の生茂った沼沢地で、葦の間から東武線の電車が走っていくのが見えました。かつての新開橋のあたりも、おそらく同じような風景だったのではないかと思います。

現在、私たちは浸水などの被害がほとんどない環境で暮らしています。

しかし、たとえば五十年くらい前までは、私が住んでいた島根三丁目でも台風が来ると出水し、通過した翌日、床下浸水をした友達の家を面白がって水の中を歩いて遊びに行ったものです（その家のトイレは汲み取り式でした）。また、台風で梅島三丁目の環状七号線南側の畑（そこには肥溜めがありました）と第十中学校への通学路が台風で冠水してしまい、その水の中を登校したこともありました（やっと学校に着いたら台風と出水で休校になりました）。

足立区、というより東京東部地域は、もともと水が出やすい、浸水しやすい地域でしたが、戦後に進められた治水対策でそんなことはほとんどなくなり、街はきれいになりました。そのため、かつての洪水の様子を思い出すことも難しくなっていました。

■外と内

ところで、新開橋のあったところ、千住河原町と橋戸町のあたり（今のやつちゃ場周辺）は大きな沼沢地でしたが、人家はどのくらいあったのでしょうか。なぜ、そんなことを考えるかというと、新開橋のあったところは堤外と言われていたからです。堤外と堤内という文字を足立の洪水関係の近代資料を読んでいるときどき見かけます。堤防の内と外という意味ですが、この場合、内という

のは川のない方、河川敷ではない方。人家のある方になり、外というのは川のある方、現在の河川敷側になります。現在、足立区の荒川河川敷の幅は、広いところでもせいぜい百メートルくらいかと思います。しかし、放水路が開削される前の隅田川（荒川）では、かつて土手＝堤から川岸までは相当に離れていました。この堤から川岸までが「堤外」です。ここはかなり広い土地で、そこには人が住んでいました。広いとはいえ河川敷のような場所です。

江戸時代の治水対策は、現在のそれとは違い堤防はそれほど高くなく、河川敷を広くして遊水地の役割をもたせ、大雨のときはそこに水をため市街地中心部への氾濫を防ぐというものでした（たとえば台東区の日本堤とその北側の地域など）。この広い河川敷に家を建ててはいけないということはなかったらしく、神社やお寺なども建っていました。ちなみに川口善光寺は今も荒川の脇にあります（現在、スーパ―堤防上に墓地を含めて移設中）。堤外に人が住むようになれば、大雨の洪水で被害が出るのは必定です。江戸時代から洪水被害がありました。明治以降もたびたびあり、特に有名なのは明治四十三年の洪水で、この後に荒川放水路が開削され、洪水による被害は緩和されます（なくなりはありません

でした）。放水路の開削が必要なほどに、堤外にはかなり多くの家が建っていたのでしょうか。時代は下りますが、作家の永井荷風は、昭和十一年の随筆で、荒川放水路の河川敷では葦や雑草、空以外は見えないことと、人に会わないことを喜んでいきます。明治十二（一八七九）年生まれの荷風にとって、その頃の隅田川周辺は、散策の興を催すところではなくなっていて、かわりに荒川放水路を歩いて見た河川敷の風景が、かつての隅田川の堤外に代わる場所になっていたのだと思います。

荒川放水路ができ、千住地域に人がたくさん住むようになって、千住の隅田川堤外は、川の近くまで家が建てられるようになったのでしょうか。そして、江戸時代に作られた堤（熊谷堤や掃部堤）では役に立たなくなつて、新たな堤防が必要となり、現在見られる川岸ギリギリのカミソリ堤防ができたのではないかと思います。

（当館専門員）

足立の「ウブメ」

奥村 麻由美

ウブメとは妊婦が亡くなった場合

に無念から転じるとされる化物である。今回は足立の「ウブメ」について紹介したい。

ウブメは化物の中ではポピュラーな部類であり、「産女」などと書く。日本各地で類例が確認され、中国にも同じようなものがある。現代での認識は「妊婦の死霊である」「夜道で赤子を抱いてくれと声をかける」「勇気を出して抱くとなんらかの褒賞を得る」のが大まかに共通している特徴である。古くは今昔物語に登場しており、「平季武（源頼光の家臣）」という勇気ある武士が、川を渡ろうとすると子を抱いてくれという女がおり、赤子を預かってみると枯葉が袖に残るばかり。「正体は狐であったとも」「妊婦の霊であるともいう」という締め括りになっている。これが後世には女性の産穢や供養、化物に挑む勇敢譚に結び付けられた。

柳田國男は妖怪談義の中でウブメについて、伝搬する中で多様な物語に枝分かれし、化物の質よりむしろ後半の勇敢に対する褒賞付与の方が重要視されるようになったと述べている。全国的に細かく見れば呼称など多様だが、先に述べたウブメのイメージは江戸中期の妖怪絵師鳥山石燕の影響が強い。石燕は「姑獲鳥（うぶめ）」として血染めの腰巻き姿で描いており、以降の妖怪画などでは多くがこの姿を取る。なおこの石燕

の姑獲鳥図には川と流灌頂（ながれかんじょう）が描かれている。この点については後述する。

さて『続・足立百の語り伝え』（足立区教育委員会）にウブメ伝説に該当する話が二例載っている。一つは保木間の大乗院付近、一つは花畑外ヶ原の諏訪神社付近のもので、両話とも夜更けに女幽霊に遭遇し「この子を抱いておくんなさいよ」と声を掛けられるというものである。こまでは各地のものと同じだが、どちらにも「女幽霊」とあり、「ウブメ」という名称は用いられていない。保木間の例は、皆怖がっていたが、とある肝の座った人が赤子を受け取るとそれはカラスの死骸で女の姿は消えており、正体はタヌキのいたずらであったというものである。花畑の例は手ぬぐいを姉さんかぶりにした女が池端にぶらさがっていて、声を掛けられ皆怖がったが正体は分からなかった、というもので話のオチについては述べられていない。遭遇地点はそれぞれ保木間は寺院の森、花畑は池畔となっている。

ここで注目したいのは、まず保木間の例が却って単調な古い話型に近いという点である。今昔物語の結末で狐狗狸（こくり）か霊かの二つの可能性が示されていたが、ここではタヌキのいたずらと断定されており、かつ勇気を出したところで得られた

ものはカラスの死骸となんら得はなく、勇敢譚としての後半部はない。

一方花畑の例は正体が明かされておらず、話しの締めとして「子供の夜遊びを戒めるためのものだったのだろう」となっている。そしてこちららは出沒するのが水辺となっている。この外ヶ原というのは綾瀬川の川際にあたる土地で、出沒現場は神社付近の池である。この諏訪神社はお腹の神様として腹痛やお産の信仰があったという言われも興味深い。『続・足立百の語り伝え』の同じ花畑の項目には流灌頂が子供にとって



竹沢藤次「独楽の化物」部分（当館蔵）
中央の白い布が流灌頂。墓や化物、井戸と共に描かれ、
当時から不気味なものの象徴であったようだ。



①保木間 大乗院
②花畑外ヶ原 諏訪神社
※諏訪神社は現存しない

不気味で恐ろしいものであったという話が載っている。流灌頂とは妊婦がお産などで亡くなった場合、血の池地獄に落ちるという考えに基づき川縁に立てた布に水を掛けてもらうことで供養救済するという風習である。赤い布が褪せて白くなれば成仏する、という例もあり、ウブメのイメージになっているとも言われる。花畑の流灌頂では川縁に差した竹に遺品の紅や鏡などをつけて水を掛けてもらったとある。もちろん流灌頂自体は全国的な風習ではあるが、この近辺に「水辺」「流灌頂」「お産の神社」という、典型的な妊婦の霊である「ウブメ」の登場条件は揃うのである。

また化物譚の本質である警告が目的の話であれば、当然褒賞があった。

ではならない。戒めのはずが、子供が度胸試しを始めては元も子もないのである。ここでは脅しだけが強調されている。

この二例を比較して言えることは、同じ区内でありながら変化の形を見ると伝搬した元の話が違うのではないかとということである。時期は不明だが別の話型がそれぞれ入って定着したと考えられる。また本来勇敢に對する褒賞譚は武士の思想が反映されている話が多く、その部分が付随していない点は、この地域においては勇敢よりも暗い夜を警戒することに重点をおいた物語である必要があったということである。ただ、例えば花畑の「あねさんかぶりにしてツタからぶら下がる」というのはこの地域で元話が独自にアレンジされたと思われる、おどろおどろしい血染めの腰巻き姿よりはどこかユーモラスで面白い。

現代では、保木間に化物が出るほどの深い森はなく、外ヶ原の諏訪神社は区画整理で廃社となり存在しない。しかしながらこうして民話に残る幽霊や妖怪、狐や狸は、ただの非科学的なオカルト話ではなく、当時の人々がどのように暮らし、何を恐れて危険を避けようとしていたのか、ユーモアのある方法で我々に伝え残してくるものなのだ。

はい、文化財係です 12

出土した煉瓦

―近代産業の文化財―



文化財係では、区内某所から大量の煉瓦が出土したとの連絡を受け、七月十五日と十九日に調査を行いました。この調査では、煉瓦研究ネットワーク東京の会長斎藤進氏、副会長中野光将氏、梶木理央氏、井畝良太氏のご協力を得ました。同会は、様々な自治体の学芸員や煉瓦を愛好する人々によって創立され、煉瓦の見学会や研究活動を行い、ホームページでは煉瓦について詳細に紹介しています。今回の内容は、皆様のご教示によるものです。

■足立区と煉瓦産業

足立区はもともと瓦産業が盛んな土地だったこともあり、煉瓦製造が極めて盛んな地域でした。斎藤氏の研究によると、明治二〇（一八八七）～四二年までの間、東京には五六の煉瓦工場が確認されますが、その内、半数以上の二九もの煉瓦工場が足立区域に集中していました（斎藤進「総論 東京における煉瓦と考古学」『月刊考古学ジャーナル』六六四号、二〇一四年）。ここに足立区と煉瓦産業の深いつながりが示されています。

ですが、実は足立区の煉瓦産業については、ほとんどわかっていません。

■出土した煉瓦の生産地

調査では、様々な会社が製造した煉瓦が見つかりました。ざっと挙げてみると、新しい一万円札の肖像に選ばれ注目されている渋沢栄一が創立した日本煉瓦製造株式会社（埼玉県深谷市）、近隣の小菅煉瓦（東京都葛飾区）・品川白煉瓦（東京都品川区）、さらには本社が遠方にある大阪窯業株式会社（大阪府大阪市）・東洋硝子株式会社（大阪府堺市）・磐城耐火煉瓦合資会社（福島県いわき市）などです。これらは、煉瓦に刻まれた刻印などからその製造会社を知ることができました。

しかし、出土した大量の煉瓦の中には足立区で製造されたものも入っているはずですが、残念ながら刻印を確認することができず、詳細はわかりませんでした。

■耐火煉瓦と硫酸瓶

今回の調査では、通常のいわゆる赤煉瓦ではなく、熱に強い耐火煉瓦も多く発見されました。赤煉瓦の原料は粘土で、一〇五〇程度まで耐えることができますが、耐火煉瓦の主原料は珪質を含む耐火粘土で、一六五〇度の熱にも耐えるため、鉄鋼業・ガラス工業などの窯炉（ようろ）に使用されました。

耐火煉瓦が多く発見されたことに

関連しますが、複数の硫酸瓶の破片も確認されました。硫酸瓶とはその名の通り、硫酸をはじめとした化学薬品を入れておくもので、昭和三十年代（一九五五）頃まで使用されていた。他にも土管やガラスなどの破片も見つかっています。

■鋳（からみ）煉瓦の出土

鋳とは、スラグあるいは鉍滓（こいうさい）と呼ばれる鉍石から金属を取り出した後の残骸のこと、煉瓦の中に鋳が混ざっているものを鋳煉瓦といいます。別名を鉄煉瓦ともい、独特のぶい黒色の光沢をもっています。北区にあった関東酸曹（現日産化学株式会社）という会社が製造していたことで知られており、この地域の煉瓦のひとつの特徴ともなっていました。こうした煉瓦が出土したことも、重要な発見でした。

耐火煉瓦や鋳煉瓦の使用、硫酸瓶の存在などから、今回出土した煉瓦は、化学薬品等の工場の残骸の可能性が想定されます。

■手抜き成型と機械成型

煉瓦はもともと手で成形される手抜き成型で造られていましたが、明治二十二年に機械成型が導入されました。手抜き成型の場合、型枠の中に材料となる粘土を入れて、余分な部分を道具できれいに整えます。そのため断面がきれいに平滑になります。ところが機械成型の場合、成型

機から出てきた粘土をピアノ線で一気に切断するため、しわのような痕跡が残ってしまいます（写真参照）。今回、機械成型の痕跡を明瞭に示す煉瓦が発見されました。当時の煉瓦造りの様子がよくわかる資料として重要です。

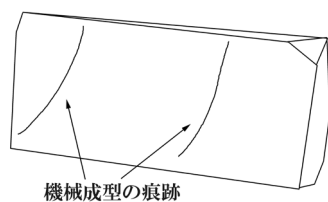
ちなみに、郷土博物館には、型となる「ワク」と成型するための「シツペ」という手抜き成型の道具が常設展示されていますので、是非ご覧ください。

■煉瓦の保存

出土した煉瓦の一部は、文化財係で保管しています。足立区の産業史を語る上で、煉瓦産業は欠かすことのできないものですが、その実態解明はこれからの課題となっています。今後、文化財係では足立区の煉瓦について調査研究を進めていく予定です。

※今回の調査でご協力賜った皆様に、深くお礼申し上げます。

（文化財係学芸員 佐藤貴浩）



機械成型の痕跡